



## 目次

センター活動報告 .....	2
第 23 回日独学術シンポジウムを開催 「バイオ ミメティクス:革新的な未来のため自然に学ぶ」...2	
フンボルト財団主催ネットワークミーティングに参加 .....	2
サマー・プログラムオリエンテーション 2018 を開催 ... .....	3
シュツットガルト大学 Study Abroad Fair での プロモーション活動 .....	3
カイザースラウテルン工科大学における Core-to- Core シンポジウムへ出席 .....	4
平成 30 年度採用海外特別研究員オリエンテ- ーション及びキャリアフォーラムを開催 .....	4
2018 年度日独若手専門家交流 (Junior Experts Exchange Program) に参加.....	5
センター長コラム.....	5
センターからのお知らせ .....	6
今後のイベント.....	6
2018 年 4 月 1 日より国際協力員 2 名が着任.. .....	6
ドイツ学術ニュース .....	7

【表紙写真: マイバウム(Maibaum:5 月の木)】5 月 1 日になると、街中に短冊のような色とりどりの飾りをつけた白樺の木が現れます。ライン川流域を始めとするドイツ西部では、想いを寄せる女性や恋人の住む家の前に、男性が白樺の木を立てる習慣があるそうです。



# センター活動報告

## 第 23 回日独学術シンポジウムを開催

「バイオメティクス:革新的な未来のため自然に学ぶ」

日時：2018年4月20日（金）、21日（土）

場所：Senckenberg Biodiversität und Klima  
Forschungszentrum (SBiK-F) (フランクフルト)

JSPS ボン研究連絡センターは、2018年4月20日及び21日の2日間、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会 (JSPS Club) との共催で、第23回日独学術シンポジウム「バイオメティクス:革新的な未来のため自然に学ぶ」をフランクフルトで開催しました。当日は、JSPS 事業経験者を中心として約130人の参加者が来場しました。日本からは、千歳科学技術大学の下村政嗣教授、千葉大学の劉浩教授、大阪大学の齋藤彰准教授、浜松医科大学の針山孝彦教授の4名が講師として参加しました。

1日目は、同窓会の Heinrich Menkhaus 会長の挨拶からスタートし、その冒頭、今年相次いで逝去された田中靖郎、新井榮一両元ボン研究連絡センター長へ追悼の言葉が述べられました。続いて、在フランクフルト日本国総領事館の河原総領事をはじめとする、日独両国の代表者からの挨拶がありました。今回のテーマであるバイオメティクス（生体のもつ優れた機能や形状を模倣し、工学・医療分野に応用することを目的とした学問）についての導入の講演の後、2つのセッションを実施しました。これらのセッションでは、歴史的背景として、日本で活動したドイツ人地理学者の Johannes Justus Rein についての紹介があり、また、日独両国におけるロボットや人工知能の現状についての報告がありました。2日目にも、2つのセッションを実施し、これらのセッションでは、昆虫とフォトニクス、細胞や生物医学の視点からの報告と議論がなされました。



(左から) Heinrich Menkhaus 会長、河原節子総領事



(左から) 講演者の Sarah Strauß 氏、齋藤彰准教授



コーヒーブレイクの様子

今回のシンポジウムは多くの参加者を迎え、いずれのセッションの後にも、活発な質疑応答が行われました。またコーヒーブレイクにおいても盛んな意見交換が行われました。セッション終了後には、小平センター長より、シンポジウムが盛況のうちに終了したことへの謝辞とともに、今後の日独学術交流のさらなる発展への期待が述べられました。

## フンボルト財団主催ネットワークミーティングに参加

日時：2018年4月25日（水）

場所：レーゲンスブルク大学 (Universität Regensburg)

参加者：田畑国際協力員

4月25日～27日、フンボルト財団 (AvH) が支援する奨学生のためのネットワークミーティングがレーゲンスブルク大学で開催されました。AvH は本会のドイツにおける対応機関の1つであり、研究者の学術交流を支援する機関です。当該イベントは、同財団の支援を受け活躍する研究者のネットワーク構築を目的に毎年開催されており、今回は約160名の奨学生が集まりました。4月25日には、レーゲンスブルク大学学長による挨拶お

よび同大学の紹介、AvH 事務局次長による同財団の概要と活動紹介の後、2016年ソフィア・コバレフスカヤ賞受賞者であるレーゲンスブルク大学 David A. Egger 氏から“More from the Sun with the Help of new Materials and Supercomputers”と題した基調講演が行われました。講演後は、奨学生の出身地域ごとに8つのグループに分かれディスカッションの時間が設けられ、田畑国際協力員はインド・日本・韓国・ベトナム人奨学生のグループに参加しました。グループディスカッションでは、奨学期間が始まって間もない奨学生と、終了が近い奨学生との間で意見交換が活発に行われるとともに、奨学生が AvH アジア担当と直接顔を合わせる機会となっていました。

## サマー・プログラムオリエンテーション 2018 を開催

日時：2018年5月9日（水）

場所：Gustav-Stresemann-Institut（GSI）（ボン）

JSPS ボン研究連絡センターは、2018年5月9日、ドイツ学術交流会（DAAD）との共催で、サマー・プログラムオリエンテーション 2018 をボンで開催しました。イベント当日は、6月に渡日を控える20名のうち15名が参加しました。

JSPS サマー・プログラムは、欧米5か国の博士号取得前後の若手研究者に対し、夏期2か月間、日本語及び日本文化に関するオリエンテーションと、我が国の大学等研究機関において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供するものです。本イベントは、ドイツからのサマー・プログラム参加者が渡航前に一同に会し、ネットワーキングの機会を提供することを目的としています。また、近年の参加者からの報告や、サマー・プログラム参加後に応募可能なフェローシップについても、情報提供を行っています。

当日は、小平センター長の歓迎の挨拶からスタートし、本プログラムの推薦機関であるドイツ学術交流会（DAAD）の Strowa 氏より DAAD の事業紹介が行われました。その後、参加者全員による自己紹介をはさみ、菊池国際協力員によりサマー・プログラムの概要説明、出口副センター長による JSPS 国際事業の紹介が行われました。コーヒーブレイクでは、参加者同士で和やかに交流が行われました。後半では、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）の Staguhn 氏によって同会の活動紹介がありました。その後、2017年度プログラム参加者であり、国立研究開発法人物質・材料研究機構（NIMS）に研究滞在した Bükler 氏（ビーレフェルト大学）、新潟県立歴史博物館に研究滞在した Iwe 氏（フランクフルト考古学博物館）の2名から、日本での経験をもとにした発表が行われまし



（左から）講演者の Christian Strowa 氏、Wolfgang Staguhn 氏



（左から）2017年度プログラム参加者の Björn Bükler 氏、Karina Iwe 氏

た。Q&A では活発に意見交換が行われ、特に日本での日常生活面について、2017年度プログラム参加者への質問が集中していました。参加者たちは、研究滞在する日本での生活をより具体的にイメージするとともに、疑問や不安を解消することができたようでした。

夕食会では、ボン研究連絡センタースタッフや講演者を交えて参加者が食事を共にしました。ここでも終始和やかに参加者同士の交流が行われ、話題は尽きない様子でした。

このプログラムを機に日独研究者の交流が深まり、将来にわたって広がることが期待されています。

## シュツットガルト大学 Study Abroad Fair での プロモーション活動

日時：2018年5月8日（火）

場所：シュツットガルト大学（Universität Stuttgart）

参加者：出口副センター長

シュツットガルト大学において行われた Study Abroad Fair に参加し、本会の外国人特別研究員事業をはじめとする国際交流事業の紹介を行いました。

当日は国際センターの建物の入口部分に国やエリアごとに分けられたデスクに各種資料が並べられ、興味のある学生が気軽に

立ち寄って資料を収集するとともに担当者に質問ができるようになっていたほか、隣接する部屋で各機関によるプレゼンテーションが順番に行われました。

本会からは出口副センター長が国際交流事業の紹介をするとともに、引き続いて、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）の Staguhn 氏により、同窓会による日独学術交流支援の取り組みについての紹介がありました。プレゼンテーションの時間以外には、来場者のほか、デスクで来場者対応をしていた国際交流担当の教職員にも積極的に外国人特別研究員事業等について紹介を行いました。

## カイザースラウテルン工科大学における Core-to-Core シンポジウムへ出席

日時：2018年5月29日（火）

場所：カイザースラウテルン工科大学

（Technische Universität Kaiserslautern）

参加者：出口副センター長

東北大学が英国のヨーク大学、ドイツのカイザースラウテルン工科大学とともに実施している、JSPS 研究拠点形成事業（A.先端拠点形成型）「新概念スピントロニクス素子創製のための国

際研究拠点形成」の第7回ワークショップがカイザースラウテルン工科大学で開催され、3日間のプログラムのうち2日目に出口副センター長が参加しました。

当日は午前と午後にそれぞれ2つのセッションが行われたほか、夕方からはポスターセッションが行われ、それに合わせてインフォメーションデスクを設置し、事業の関係教員や学生に、本会の外国人特別研究員事業などの国際交流事業について紹介しました。ワークショップには大学院生も多数参加しており、ポスターセッションでは活発な意見交換が行われていました。

## 平成30年度採用海外特別研究員オリエンテーション及びキャリアフォーラムを開催

日時：2018年6月8日（金）

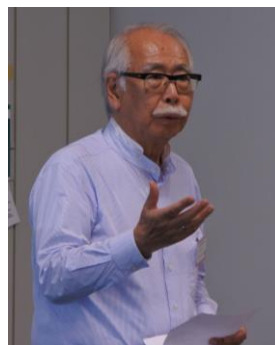
場所：Gustav-Stresemann-Institut（GSI）（ボン）

JSPS ボン研究連絡センターは、平成30年度採用海外特別研究員（ドイツ派遣者）を対象にしたオリエンテーションおよびキャリアフォーラムを開催しました。当日は、平成29年度からの派遣者も含めて、11名の海外特別研究員が参加しました。

本イベントは、渡独して間もない海外特別研究員が研究滞在を円滑かつ効果的に進められるよう、過年度からドイツに滞在している海外特別研究員や在独日本人研究者とのネットワーク構築の機会を提供することを目的としており、参加者からの好評を受けて、平成28年度から継続して実施しています。

始めに、小平センター長による歓迎の挨拶がありました。次に、参加者全員による自己紹介および研究内容紹介が行われました。研究内容からドイツでの生活や趣味について一人ひとり率直に語ってもらうことで、早くも打ちとけた雰囲気となりました。その後、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）のSabine Ganter-Richter氏から、日独学術交流支援の取組みについて紹介がありました。続いて、マックスプランク固体物理学研究所グループリーダーの中村浩之先生より、所属機関の概要も含めたドイツでの研究生活に関する講演が行われました。ご自身の経験に基づいた講演内容は参加者たちにとって非常に参考になるものと思われ、皆興味深い様子で聞き入っていました。その後のコーヒープレイクでは、参加者同士での交流が積極的に行われていました。

後半では、ミュンヘン工科大学教授の井上茂義先生により、キャリア形成についてご自身の経験に基づいた講演が行われました。参加者の将来のドイツでのキャリア形成についての関心も強く、時々質問を交えながら、熱心に耳を傾けていました。その後、日本学術振興会海外派遣事業課の坂野課長代理から、海外特別研究員の方々への期待とともに、日本でのキャリ



（左から）小平桂一センター長、Ganter-Richter氏



（左から）講演者の中村浩之氏、井上茂義氏

ア形成を見据えた若手研究者に対する支援についての説明が行われました。ドイツと日本それぞれのキャリア形成に関する講演により、キャリアパスや若手研究者支援についての参加者たちの理解が深まったようでした。最後に、出口副センター長によるJSPS国際事業や各日本人研究者ネットワークの説明がありました。

オリエンテーション後の夕食会では参加者全員が一緒に食事をし、ここでも活発に意見交換が行われました。講演者の先生方も多くの質問を受けていました。

海外特別研究員は渡独時期や専門分野も様々であり、所属研究機関もドイツの各地にあるため、専門分野を超えて派遣者同士が知り合う機会はなかなかありません。今回のようなイベントにより同じ立場の若手研究者と知り合い、今後のキャリア形成に関する情報交換の機会を持つことで、ドイツでの研究滞ながより実り多いものとなることが期待されます。



## 2018 年度日独若手専門家交流（Junior Experts Exchange Program）に参加

日時：2018 年 6 月 11 日（月）

場所：ドイツ 連邦教育研究省（ボン）

参加者：出口副センター長、田畑国際協力員

6 月 11 日、ドイツ連邦教育省（BMBF）において、2018 年度

日独若手専門家交流事業（Junior Experts Exchange

Program）に参加する日本人若手研究者 8 名を対象に、

BMBF、ドイツ研究振興協会（DFG）、フンボルト財団

（AvH）、および日本学術振興会（JSPS）による研究助成

や日独研究交流促進のための取り組み等の紹介が行われました。

このプログラムは、日独間の学術対話を強化することを目的

としてベルリン日独センターと BMBF の協力のもと実施されてお

り、日本の大学・研究所・企業等の若手研究者をドイツに招

待し、約 8 日間にわたりドイツ各地の大学・研究所を訪問して

ドイツの研究者と意見交換する機会を提供しています。対象者

は自然科学系の 40 歳以下の官民の研究者で、毎回専門分

野を特定して実施していますが、今年は「光学/フォトニクス」に  
焦点を当てて実施されました。

当日は、BMBF の Dr. Nicole Zingsheim アジア・オセアニア担  
当課長補佐から歓迎の挨拶と BMBF の概要説明があり、続いて  
ファンディングエージェンシーVDI の Dr. Christian Flüchter から  
ドイツにおけるフォトニクス分野の現状やその研究を支援するプ  
ログラムや今後の展望について説明がありました。さらに DFG の  
Dr. Franziska Langer によるドイツの研究助成制度の説明、  
AvH アジア担当の Dr. Judith Schild からの概要説明に続い  
て、出口副センター長が日独研究連携を支援するための JSPS  
事業やフェローシップ等を紹介しました。

BMBF でのプログラムに引き続いて、近くのレストランに場所を移  
しての昼食会が開催され、参加者及び講演者が親睦を図ると  
ともに活発な意見交換が行われました。参加者の所属は大学  
（3 名）、公的研究機関（2 名）、地方公共団体（1  
名）、民間企業（2 名）と多岐にわたり、本センター職員にと  
ってもネットワーキングの良い機会となりました。

## センター長コラム

4 月末に東京で日独共同学長シンポジウムが開催され、主催者側の要請も有って参加したが、日独の大学をめぐる状況には際立った違いが見られた。

「閉じて競争」させて淘汰することによりピークを際立たせる手法と、「開いて協力」して切磋琢磨し、お互いを高めようという手法の違いである。背景には現在の両国の経済状況の違いもあるが、将来に向けてのビジョンのタイムスケールの長さの違いが基本に在るように思えた。短いタイムスケールで成果を求めるか、長いタイムスケールで将来を担う「人を育てる」か、の違いではなからうか。

5 月に入って学振・総研大サマー・プログラムのドイツ人フェローへのオリエンテーションを、6 月に入っては在独学振海外特別研究員のオリエンテーション兼キャリアフォーラムを催した。前者は夏休み 2 カ月間、学位取得前後の若い人達を日本に招いて研究環境を知ってもらい、近い将来、外国人特別研究員として日本に長期滞在してもらうためのものである。今どきの若い研究者は忙しい環境に身を置いていて、短期の外国訪問者の数は急増しているが、2 年間も異国に腰を据えて研究生活を送ろうという気概のある人は決して多くはない。しかしドイツで接している限り、こうした若者たちは日独ともに優秀で元気である。

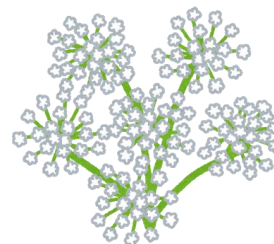
このような会の挨拶で、私はドイツのフンボルト財団のキャッチ・コピーを引用して「卓越した知性は世界を繋ぐー その一員たれ」と励ますことにしている。また、フェローシップは個々人に与えられるが、異国では個々人が母国を代表する「ミニ大使」としての自覚をもって、相互理解と相互信頼の構築に努力するようにお願いをしている。日本人がドイツ人かを問わずに、グローバル化時代の世界を繋ぐ一員になって欲しい。しかし同時に、自分の国の良いところに気づき、それを大切にしたい。グローバルな時代だからこそ、優れた多様性が大切なのだ。

2018.06.14 小平 桂一（こだいら けいいち）

# センターからのお知らせ

## 今後のイベント

- |                  |   |
|------------------|---|
| 9月24日（月）         | JSPS Abend（ボン）、日本人研究者ネットワーク（JR-Net）連絡会議（ボン） |
| 10月5日（金）～6日（土）   | 会員による会員の招待（MIMe）（ボン）                        |
| 10月6日（土）         | 第6回ジュニアフォーラム（ボン）                            |
| 11月22日（木）～23日（金） | JANET-FORUM 2018（フランス・リヨン）                  |
| 2月7日（木）～8日（金）    | 第15回日独学術コロキウム（ベルリン）                         |



## 2018年4月1日より国際協力員2名が着任

筑波大学の菊池南と申します。

昨年度1年間は東京本部で、多国間交流による研究を支援する「研究拠点形成事業」を担当していました。大学で働いていたときと比べて、事業規模の大きさに驚くとともに、日本全国の大学や研究機関の方々ややりとりをしたことは良い経験になりました。また、会内では、様々な機関から出向されている職員の方々の姿勢に学ぶことが多くありました。

今年度は、ドイツ各地でのイベント運営をサポートし、国際的なネットワークの場に携われることを期待しています。

1年間どうぞよろしく願いいたします。



産業技術総合研究所の田畑千恵子と申します。

昨年度1年間は東京本部で、学振の国際事業経験者による「研究者コミュニティ」（同窓会）の支援、「外国人研究者再招へい事業」、来日直後の外国人特別研究員オリエンテーションを担当していました。他に先駆けて活動を開始されたドイツ語圏同窓会を支援するボン研究連絡センターで勤務できることを、大変嬉しく思っています。

私は今回が初の欧州滞在で、赴任が決まってからドイツ語の勉強を始めました。

1年という短い期間ですが、どうぞよろしく願いいたします。

## 日本人研究者ネットワーク（JR-Net）のご紹介

本センターHPでは、ドイツ語圏で自主的に立ち上げ運用されている日本人研究者ネットワークを紹介しています。

詳細はこちらをご参照ください。

<https://www.jspo-bonn.de/ja/to-all-japanese-researchers/japanese-researchers-network/>



# ドイツ学術ニュース

## 10 人の研究者が若手研究者のためのドイツの最も重要な賞を受賞

ドイツ研究振興協会（DFG）とドイツ連邦教育研究省（BMBF）がハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞を 2018 年 5 月 29 日ベルリンの授賞式で授与予定

2018 年は、10 名の研究者（女性 5 名、男性 5 名）が、ドイツの若手研究者にとって最も重要な賞であるハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞を受賞することとなった。ドイツ研究振興協会（DFG: Deutsche Forschungsgemeinschaft）、ドイツ連邦教育研究省（BMBF: Bundesministeriums für Bildung und Forschung）によって任命された選考委員からなる選考委員会がボンで行われ、そこで選出されたものである。5 月 29 日に行われるベルリンでの授賞式で、受賞者にはそれぞれ 20,000€ の賞金が贈呈される。

ハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞は、学術の卓越性への道を追求し続けるための評価や動機付けとして、1977 年以来、極めて優れた若手研究者に毎年授与されている。1980 年からは、原子物理学者であり DFG 元会長であるハインツ・マイヤー＝ライプニッツ氏（在任期間 1973 年～1979 年）の名を冠している。ハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞は、ドイツの若手研究者にとって最も重要な賞とされている。

## 世界レベルで魅力のある欧州高等教育圏の前提として、ボローニャ・プロセスは学術的自由を強調

ドイツの高等教育システムは、非常に上手くヨーロッパを結びつけており、魅力的で接続性に優れている

ソルボンヌ宣言への署名後 20 年となる 2018 年 5 月 24 日、25 日、ボローニャ・プロセス参加 48 カ国の高等教育担当大臣が、欧州高等教育圏の将来的展望を議論するための会議をパリで開催する。連邦内閣によって今日、また、文化大臣会議によって 2018 年 2 月 15 日にすでに採択された、「ボローニャ・プロセス（2015 年～2018 年）」の目標達成に関する報告書は、高等教育分野における内外での進展を取り上げている。ボローニャ・プロセスは、ヨーロッパ全土わたり、各国の高等教育システムに多大なる変革をもたらした。学士課程と修士課程という段階的な学術システムの画期的な導入は、学術課程の透明性、比較可能性、教育の質の保証を伴うものである。これは、近年

今年の賞には、あらゆる研究分野を代表する合計 140 名の研究者が推薦された。選考委員会の議長を務め、数学者でもある DFG のホッホブリュック副会長は「全候補者の業績やこれまでの経歴は大変優れており、委員会が受賞者を選考するのは非常に楽しい仕事でした。」と述べた。2018 年ハインツ・マイヤー＝ライプニッツ賞受賞者は下記の通り。

- Jennifer Nina Andexer、生物化学、フライブルク大学
- Alexey Chernikov、凝縮物理学、レーゲンスブルク大学
- Sascha Fahl、コンピューターサイエンス、ライプニッツ・ハノファー大学
- Benedikt Göcke、カトリック神学、ルール大学ボーム
- Valeska Huber、現代史、ベルリン自由大学
- Lucas Jae、機能ゲノム科学、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン
- Benjamin Kohlmann、英文学、フライブルク大学
- Eva C. M. Nowack、進化生物学、ハインリッヒ・ハイネ大学
- Antonia Wachter-Zeh、通信工学、ミュンヘン工科大学
- Xiaoying Zhuang、数値力学、ライプニッツ・ハノファー大学

DFG:

[www.dfg.de/en/service/press/press\\_releases/2018/press\\_release\\_no\\_11/index.html](http://www.dfg.de/en/service/press/press_releases/2018/press_release_no_11/index.html)

(2018 年 3 月 27 日)

上昇し続けている学生のモビリティと、それに伴う相互理解に本質的に貢献している。

次回のパリにおける高等教育担当大臣会議では、次の 3 つのテーマが決議される。第一のテーマは、最重要課題であるボローニャ改革の実施の際に、援助を必要とする国々がどのように支援されるべきか。第二は、デジタル化の問題、そして第三は、欧州高等教育圏の基本原則（例えば、学術的な自由や、高等教育機関の民主的な構築など）への違反である。

この他に、フランスのマクロン大統領を筆頭に EU 加盟国首脳によって提唱されている欧州高等教育機関のネットワーク化をさらに進めるにはどうすべきかについても議論される。

ドイツもこの議題に積極的に加わる予定である。

BMBF:

<https://www.bmbf.de/de/bologna-prozess-betont-akademische-freiheit-als-voraussetzung-eines-global-attraktiven-5924.html>

(2018 年 3 月 28 日)

## HRK 調査：高等教育を受ける難民の増加 学籍登録者数はほぼ 3 倍に—発展は期待通り

ドイツの高等教育機関における難民の融合は、期待通りに進んでいる。実際に難民の学業の歩みは、ますます成功を収めている。これは、加盟校において実施されたドイツ大学長会議（HRK: Hochschulrektorenkonferenz）の調査によって明らかになった。

2017 年～2018 年の冬学期と前年の冬学期を比較すると、新たな学籍登録者数は約 3,000 名にのぼり、およそ 3 倍に増加している。この数には、学士課程、修士課程、博士課程の登録者が含まれている。本調査への高等教育機関からの回答は、個別カウンセリングの数が増加し続けていることを示している。

2015 年～2016 年の冬学期の問い合わせ開始時期以降、この傾向は顕著である。

ただし、学籍登録の後も、新しく学業を始めた難民や、追加の学業を修めなければならない難民は特別なカウンセリングを必要としていた。高等教育機関の 3 分の 1 が女性の難民に、補助的な支援を提供している。学籍登録をしている女性の割合は 20～25%であるが、これは年齢と資格に照らして学業を修め

る能力があるとされる難民の総数に占める女性の割合とほぼ一致している。

「これらすべてが、高等教育機関にとって、大変厳しい更なる課題である」と、HRK のヒップラー（Horst Hippler）会長は述べている。「これらの課題に可能な限り対応できるよう、既存のプログラムを進歩させ、様々な取り組みを巧みに結びつけなければならない。」

すでに、難民に向けての学業体験や聴講といった制度の需要は明らかに減少している。直接的な学業への準備にはならないこうした制度への参加は、ほぼ半減した。ヒップラー会長によれば、「この大幅な減少は、より多くの難民が学位取得のために構成された準備プログラムの重要性を認めていることを示している」ということである。

HRK:

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/hrk-befragung-immer-mehr-fluechtlinge-qualifizieren-sich-im-studium-immatrikulationen-fast-verdreif/>

（2018 年 4 月 10 日）

## ピーターアンドレ・アルト氏が新しい HRK 会長に就任

ベルリン自由大学長のピーターアンドレ・アルト（Peter-André Alt）氏は、8 月 1 日からドイツ大学長会議（HRK）の新会長に就任予定である。4 月 24 日にマンハイムで行われた総会では、任期 3 年間の HRK 会長として、圧倒的多数でアルト氏が選出された。

次期 HRK 会長となるアルト氏は、ベルリン自由大学でドイツ言語学、政治学、歴史、哲学を学び、博士号および大学教授資格（Habilitation）を取得した。ルール大学ボーフム、ユリウス・マクシミリアン大学ヴュルツブルクで教授職を執った後、2005 年にベルリン自由大学に教授として戻った。哲学・人文科学の学部長を 2 年間務め、2010 年にベルリン自由大学の学長に選出された。

現在アルト氏は 57 歳であるが、2011 年から 2012 年までと 2017 年から 2018 年までの 2 期、ベルリン区域の大学長会議の議長を務めた。2014 年からは German U15 の CEO を 2 年間務めた。

アルト氏は、2012 年から HRK 会長を務めたヒップラー氏（Horst Hippler）の後任となる。

HRK 会長の任期は 3 年であり、1 度だけ再選が可能である。2015 年の HRK 規則改正後、選考委員会は初めて、アルト氏を唯一の候補者として指名した。

HRK:

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/peter-andre-alt-wird-neuer-hrk-praesident-4347/>

（2018 年 4 月 24 日）

## オープン・アクセス交渉におけるヨーロッパ高等首脳会議

2018 年 3 月 2 日、ドイツ大学長会議（HRK）のヒップラー（Horst Hippler）会長の呼びかけにより、ヨーロッパ高等首脳会議がベルリンで行われた。EU のオープン・アクセス特使として最近任命されたロバート・ヤン・スミッツ（Robert-Jan Smits）氏も、この会議に出席した。

現在、各国で大手出版社（エルゼビア、シュプリンガー・ネイチャー、ワイリー）との個別交渉が進行中であり、これに関与している大学長、資金団体、図書館員からなるチームが意見交換を行った。現行の購読予約ベースの出版システムから、完全なオープン・アクセスの「パブリッシュリード」システムへの移行を加速するための方針と具体的な行動について、議論が交わされた。

参加者は戦略を調整すること、交渉の進展や結果について最適な透明性を確保することに合意した。

HRK のヒップラー会長は、「オープン・アクセスへの移行が遅すぎることについて、私は非常に懸念を抱いている。学術機関と大手出版社とのパートナーシップが限界に達したことは、この会議で広く同調された。」と述べた。

HRK:

<https://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/european-high-level-summit-meeting-on-open-access-negotiations-4364/>

（2018 年 5 月 3 日）



## 日独共同学長シンポジウム

### 大学と社会との協力および交流は不可欠であるが、明確なルールが必要

未来志向の大学の発展のために大学と社会との協力および交流は不可欠であるが、大学は基本ミッションに忠実でなければならず、かつルールは明確でなければならない。2018年4月26日～27日に東京で開催された日独共同学長シンポジウムでは、このように結論付けられた。本シンポジウムは、国公私立大学団体国際交流担当委員長協議会（JACUIE: Japan Committee of Universities for International Exchange）主催、ドイツ大学長会議（HRK）およびベルリン日独センター（JDZB: Japanisch-Deutschem Zentrum Berlin）との共催により行われた。

このシンポジウムで日独両国からの専門家160名（学長65名を含む）は、日独両国の大学が研究や教育といった本来の目的をなおざりにすることなく、効果的かつ互恵的に社会やビジネス界、産業界と協力していく方法について、議論を交わした。長期的な協力のための成功の鍵は何か？抑制と均衡のどちらが必要なのか？対等な立場で協力および交流が行われる中で、どのように利益のバランスをとればよいのか？

2016年にベルリンで開催された前回のシンポジウムでは、大学と社会との効果的な交流に向けて、以下の3つの指針が採択された。

- 基礎を健全な教育および訓練に置く  
総合的かつ学問的に健全な教育および訓練は、イノベーションや社会の進歩の基礎となる。専門知識や専門能力の伝達だけでなく、倫理原則に基づいて行動する成熟した人材の育成もこれに含まれる。
- 分野横断的、セクター横断的な協力の促進  
専門分野の多様性は現在の水準で維持されなければならない。社会において重要な役割を果たす専門分野には、工学や自然科学だけでなく、社会科学や人文科学も含まれる。同時に、分野横断的およびセクター横断的な協力を、あらゆるレベルで永続的に推進しなければならない。
- 教育および研究の本質と必要性に適した資金計画および業績評価基準の創設  
資金プログラムおよび業績評価の基準は、研究と高等教育の特徴に適したものでなければならない。学術教育および研究の本質と必要性に適し、あらゆる利害関係者に受け入れられるような成功業績の定義を策定することが重要である。そのため、業績評価には、量的側面だけでなく質的側面も適切に組み込む必要がある。加えて、オープンでダイナミック、かつ分野横断的・セクター横断的な研究パートナーシップを奨励するような、適切な資金プログラムが創設される必要がある。

これらの3つの指針に基づいて、大学の代表者たちは、日独両国の大学の現状を考慮しつつ、両国のベスト・プラクティスを紹

介し合い、この方針を実行に移すためにはどのような行動が必要かを議論した。

JACUIEの永田恭介座長（筑波大学学長）は、次のように述べた。

「イノベーションとグローバル化によりもたらされた数々の課題に直面する中で、持続的かつ包括的な未来の社会に貢献し、チャレンジ精神、幅広い視野、高度な知識およびスキルを兼ね備えた人材を育成することが、大学に期待されている。さらに、知識社会の到来に伴い、大学は新しい知識やイノベーションを生み出すとともに、現在および将来の課題を解決することで、国家と地域の経済社会発展に貢献することが求められている。これらの期待に応えるために、大学は幅広い基礎研究を推進するという中核的役割を果たしながら、社会の様々なセクターと連携し、学生、教員、カリキュラム、研究の多様性を高めるべきである。また、このような新たな課題に対処するための効果的かつ柔軟なガバナンス体制を構築する必要がある。このためには、大学が政府による安定した予算を保証されることが不可欠である。さらに、イノベーションを推進するためには、産業界や研究機関と協力して、博士号取得候補者を育成することが重要である。」

HRKのヒップラー（Horst Hippler）会長は、次のように述べた。

「大学は、社会との絶え間ない対話の中で、研究および教育における重要な役割を明確にし、発展させている。大学は、社会の科学的、経済的、文化的発展に有益なサービスを提供している。大学と社会との協力および交流が適切に行われ、かつ適用されたルールが明らかで透明性のあるとき、あらゆる関係者（研究者、学生、大学全体、社会、産業界など）が恩恵を受ける。特に、博士号取得候補者や若手研究者の、大学、行政、経済界、産業界の間での双方向の流動的なモビリティは、Win-Winの関係を作り出し、産業イノベーションおよび社会全体の有益な発展にとって重要である。ドイツ政府が、共通の未来への投資が重要であることをはっきりと認識していること、この流動性を維持するために必要な資金を大学に提供していることを、私たちは喜ばしく思う。」

ベルリン日独センターのフリーデリケ・ボッセ（Friederike Bosse）事務総長は、次のように補足した。

「大学は、その立地する地域社会の良好な状態および福祉において、非常に重要なインスピレーションの源、かつ原動力である。大学によるビジネス界や市民社会とのネットワーキングや交流は、新たなビジネスやイニシアティブを生み出すための支援と同様に、地域の繁栄に貢献する。教育研究の役割や、マネジメント・スキルおよび起業的精神獲得のための支援を通じて、大学は地域だけでなく社会全体に貢献している。過去3回のシンポジウムを開催してきたが、本シンポジウムを開催できたこと、そして過去12年間の交流を深め、大学と高等教育の役割について日独間の対話を強化できたことを、とても嬉しく思う。」

HRK :

<https://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/hochschulleitungen-aus-japan-und-deutschland-austausch-zwischen-hochschulen-und-gesellschaft-brauch/>

(2018年5月14日)

## ドイツの研究、世界のトップへ

連邦政府が「研究とイノベーション報告書 2018

(Bundesbericht Forschung und Innovation 2018) 」を  
議決 / 連邦教育研究省 (BMBF) のアンヤ・カリチェック大  
臣: 「応用の迅速化が必要」

国際競争力について、ドイツは研究とイノベーション (R&I) のお  
かげで上位を維持している。これは、とりわけドイツが海外で販  
売している研究集約型商品の国際的割合が高く維持されてい  
ることに反映されている。イノベーションにかかる国際ランキング  
で、ドイツは長年にわたりトップクラスに位置する国の1つであ  
る。これらのことは、6月6日に連邦政府により議決された「研  
究とイノベーション報告書 2018」から明らかである。

BMBF のカリチェック (Anja Karliczek) 大臣は、次のように述  
べた。「ドイツは、連邦政府と民間セクターの共同コミットメントを  
通じて、国際競争力において高い地位を確立してきた。ドイツは  
世界のイノベーション・リーダーである一方、国際競争の圧力は  
高まっている。そのため、ドイツは、特に応用の点でさらなる迅速  
化が必要であり、また中国と米国に遅れを取らないよう欧州域  
内で協力していく必要がある。ドイツは新たな研究・イノベーシ  
ョン (R&I) 戦略でこれらに対応している。」ここでの重要なポイン  
トは、教育とイノベーションの方針を結びつけることである。「教育  
と高度なトレーニングは、特にデジタル化を通じて、あらゆる人々  
の仕事や社会の世界を変革している新たな技術やビジネスモデ  
ルを理解し、適用し、また生涯にわたって活用していく鍵とな  
る。」

これまで、今日のようにドイツが研究開発 (R&D) に多額の投  
資をしたことはなかった。政府や経済界、科学界は、R&D への  
支出を近年着実に増やしてきた。2016 年には、922 億ユーロと  
いう記録的な水準に達した。このうちおよそ 3 分の 2 が経済界  
によって投資されており、2016 年はおよそ 630 億ユーロという新  
たな高水準を記録した。2016 年の連邦政府からの支出は 156  
億ユーロに上った。この金額と比較すると、2005 年は連邦政府  
からの支出は 90 億ユーロであり、2005 年から 2016 年にかけて  
70% 以上増加している。

世界市場における 100 万人あたりの重要特許数について、  
2015 年にドイツは 371 件の特許を有し、米国 (200 件) と中  
国 (27 件) を大きく上回っている。しかし、上位になったことで

満足すべきではない。デジタル化の分野では、Facebook や  
Google の例が示すように、米国はより成功した新規事業を生  
み出している。中国は集中管理された産業政策に基づき、特  
定の技術に大幅な助成を行っている。カリチェック大臣は、「ドイ  
ツにとって、適切な研究・イノベーション (R&I) 政策に基づいて  
競争力を確保し、将来の成功への道を開くことは戦略的に重  
要だ。」と強調している。

その目的は、ドイツ経済のポジティブなダイナミクスを維持し、あ  
らゆる市民が研究に強いイノベティブなドイツという国の利点を  
活用できるようにすることである。そのためには、R&I が人々に役  
立ち、彼らを中心に置くことが、常に明確でなければならない。  
より早く病気を治すこと、より簡単で持続可能な移動を可能に  
すること、あるいは、コミュニケーションを安価で安全に提供でき  
るようにすることにおいても、これがあてはまる。同時に、誰もが技  
術と社会の急速な変化についていくためには、対応する能力を  
高める必要がある。これは、学校や教育でのデジタルメディアの  
使用から始まり、プログラミングスキルと IT への理解がますます要  
求される職業人生へと続いていく。オープンなイノベーションとサイ  
エンスシステムは、アイデアの開発、容易なやりとり、迅速な応  
用を促進する。

連邦政府は国内総生産 (GDP) の 3.5% を研究開発

(R&D) の割当額として投資することを目標に合意した。この  
目標は、2025 年までに経済界とともに達成されるべきである。  
それに加え、研究開発税制の導入もこの目標に寄与すべきで  
ある。

BMBF:

<https://www.bmbf.de/de/deutschland-forscht-sich-an-die-weltspitze-6309.html>

(2018 年 6 月 6 日)

### ドイツ学術ニュースについて

本センターHP では、ドイツ学術ニュースを定期的に更新  
しています！

最新のニュースや過去の記事の詳細については、こちら  
をご覧ください。

<https://www.jsps-bonn.de/ja/german-science-news/>



## ドイツ研究振興協会（DFG）、ボンで年次総会を開催（2018年7月2日~4日）

ボン大学の200周年記念を受け、ノルライン＝ヴェストファーレン州のラスチェ（Laschet）首相、連邦教育研究省（BMBF）のカリチェック大臣も祝賀行事に参加予定

2018年に創立200周年を迎えるライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボン（ボン大学）の招待を受け、2018年7月2日から4日にかけてDFGの年次総会がボンで開催される。会期中は、ドイツ最大の研究助成機関であり、ドイツ中央学術振興自治組織であるDFGの理事会から評議会、主要委員会、そして会員総会に至るすべての中央審議会が開かれる。

7月4日にボン大学の選帝侯宮殿の講堂で開催予定の会員総会では、DFGのペーター・シュトロシュナイダー（Peter Strohschneider）理事長と、ドロテー・ツヴォニク（Dorothee Dzwonnek）事務局長は、ハレで開催された昨年度の会員総会以降のDFGの振興活動を振り返る。会員総会ではさらに、

DFGの振興活動のために最も重要なデータと、採択された振興プロジェクトを記載した「年次報告書2017」が発表される予定である。その他にも、DFGにおいて最も重要な学術審議体である、評議会の選挙が議題に上がっている。

会員総会ではまた、ドイツの研究資金提供に関する最も包括的な情報源とされている「DFG Funding Atlas」の新版も発表される予定である。「DFG Funding Atlas」は、1997年から3年ごとに発行されており、特に欧州研究領域（ERA）と世界における研究資金や、DFG資金提供プログラムである特別研究領域プログラムの50周年記念に焦点を当てている。新版の「DFG Funding Atlas」は一般公開予定であり、7月5日にベルリンで行われるDFGの記者会見で、ドイツ大学長会議（HRK）、ドイツ学術財団連盟とともに発表予定である。

DFG：

[http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2018/pressemitteilung\\_nr\\_19/index.html](http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2018/pressemitteilung_nr_19/index.html)

（2018年6月11日）



（左上）ケルン中央駅構内のパブリックビューイング（右上）ライン川沿いに設置されたパブリックビューイング会場からあふれる人々（下）Uバーン駅の電光掲示板

四年に一度の夏がやってきました。サッカーワールドカップ・ロシア大会の開幕です。ドイツは大変残念な結果となってしまいましたが、しかしながら当地において、人々の関心はドイツ戦に留まりません。駅構内や電車、バスの電光掲示板でも、試合速報が流れ、街のいたるところで連日パブリックビューイングを目にします。文化としてサッカーが社会に深く息づいていることに改めて気付かされる日々です。

田畑 国際協力員

### アクセス

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, 53175 Bonn（事務所住所）

Postanschrift: 20 14 48, 53144 Bonn（郵便物用）

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

[www.jsps-bonn.de](http://www.jsps-bonn.de)

